学 位 論 文 内 容 の 要 旨

		要　　旨
学位申請者	大久保　尚子【論文博士】 （比較文化学専攻　平成７年３月単位修得退学）	本論文は、わが国近世後期の江戸の町を中心に展開した文芸や美術、芸能（とりわけ歌舞伎）との交流のなかに生まれた染織品の意匠表現に着目し、この時期の服飾文化の特質を捉えるとともに、明治期以降の波及についても言及した論考で、全体は近世後期の江戸における書画や歌舞伎の愛好、見立趣味などにかかわる意匠表現の成り立ちを論じた第１部と、明治期の見立意匠表現に注目し、近世的着想の近代図案への波及を論じた第２部により構成されている。 　第１部は第１章で天保期の人情本の描写を取り上げ、意匠文様の嗜好が芝居や書画自体に通じた人々に享受された様子とその背景を明らかにし、第２・３章で近世後期の服飾に見られる絵画的染織意匠について、当時の出版文化との相関から解明している。とりわけ第２章では、文晁、北斎、英泉ら人気絵師達の作品を刺繍で写す趣向が、絵師達の画風の評価が摺り物やその他の出版物のよって支えられ、既存の「図」や「版」を再現的に写す「写真（しょうううつし）」への嗜好として捉え、出版文化の充実がこの背景にあったとする。第３章では浮世絵師の画業と花鳥画風意匠の関係を検討している。第４・５」章では天明期の見立小紋集の作例と通常の染織意匠とを比較検討し、見立の主要題材が同時代の人々が親しんだ江戸名物、風俗に由来し、その読み解きが共感の増幅に繋がったとする。明治以降の展開について論じた第２部では、第６章で錦絵揃物「東京自慢名物会」を取り上げ、江戸以来継承された「見立模様」の遊びの意匠が、現実に応用可能な弥時期の創作図案となっていることを解明した。第７章では明治中後期の図案作品に見られる見立表現の系譜を捉え、近世的な見立の着想から近世図案の展開について考察している。 　すなわち、本論文は第１部で江戸後期における衣装の遊びと実用の境目のないあり方が、江戸における文芸や芸能、美術との絶えざる交流から生まれた意匠の性格を表すものであり、職人向けの江戸本も手がけた浮世絵達が実質的な意匠家の役割を果たしたとする。第２部で現実に応用されながらも「遊び」の要素を保ち続ける戯作浮世絵から江戸の意匠と実制作への応用を基本とする近代図案との違いを解き明かすとともに、近世的な着想の継承が近代図案創作の幅を広げたと結論づける。
論 文 題 目	近世後期服飾にみる意匠の創案と享受に関する研究 ―文芸、美術、芸能との交流と近代への波及―	
審 査 委 員	（主査）　教　授　　秋　山　光　文	
	教　授　　宮　内　貴　久	
	准教授　　神　田　由　築	
	教　授　　市　古　夏　生	
	准教授　　谷　口　幸　代	